

# 雑 感

後 藤 美代子

昨年の秋、日本地図センターから原稿をお頼まれました。あの町この町という欄に、静岡県の中のどの町かを書いて欲しいという依頼である。送って頂いた見本誌を見ると、なつかしい地形図が大量にのっていて、一遍に35年昔に思いはとんでしまった。あの頃は、地図、地形図といっても、種類が少なく、親しんでいたのは5万分の1と2万5千分の1の地形図ぐらいだった。今はカラフルだし数も豊富である。

静岡県内でとなると、あの辺の洪積台地を調べて歩いたことはあるが、町ということでは仕事で行ってもすぐ帰ってしまってよく知らない。結局、子供の頃、家族で何年か正月を過した熱海にした。熱海の今昔を書こうと考えたのである。メ切りも迫った或る日、仕事を早めに終えて熱海に出かけ市役所や図書館で、慌しく調べ物をして何とかまとめたのだが（学生時代の一夜漬けを思い出しつつ）、すっかり若い時の気分になって楽しかった。

十数年前、訪中団の一人として中国に行った時向うの通訳の女性が「大学では何を勉強しましたか？」と聞く。「地理です」と言うと続けて「放送局で働いているのは、学校で何を学んだ人が多いですか」「政治、経済、文学、科学、色々な人がいますよ」と答えたところ、「どうして、その人達は学校で学んだことを仕事にしないのですか？中国では、学んだことをを国の為に生かします」と言われてしまった。「そりゃ、生かせればいいけれど、大学で学ぶ人は数が多いから、なかなか全部がそういうわけにはいかないの。学校で身につけた物の見方、考え方を、その分野でいかせればいいのではないかしら」と応えたのを思い出す。

でも、私の場合、地理は可成役に立った。アナウンサーの仕事は多様だから。例をあげれば、気象学。大気の大循環などをはじめ、天気関係の番組に大いに役立ったし、日本全国の地図、地理が頭に入っている事は幸いだった。

勤め続けて35年。退職した時よりこの頃のほうが、その重さを感じる。何しろ、12年後に生れた娘が成長してお茶大生となり、卒業してしまったのだから、

（地理ではないけれど）彼女の卒業式にはやはり或る種の感慨があった。

その娘と、明治生まれで今年80才になる母と、昭和一桁の私と、今我が家には「女三代」が揃っている。日常の話の中に、それぞれの世代の考え方があらわれて面白いが、女性の生き方などもその一つである。私の就職の時は猛反対した母が、34年後、孫娘に向って「卒業して家でブラブラしていても仕様がなしでしょう。就職しなければ」と言っていたのがおかしかった。あの頃に比べて女性の社会進出はめざましい。狭かった門戸も広がって、昔より遥かに多様な職種で多数の女性が活躍している。

結婚までの腰かけが主流だった当時、女の仕事は男性の補助的なものが多く、昇給昇進の男女格差は当然前だった。「もっと女性を採れ？だって男は定年までいますよ。女性は何時やめるか分らない。そういう人を採れますか」と言われたことがある。何か言っても「どうして？」と不思議そうな顔をする人が多かった。その中で、女性もやらなければと、男性並みに仕事が出来てくることを身をもって示してきた。出産の時はやめるだろうという壁も、一人二人と突破して、つき崩した。仕事と家事や育児を何とか両立させようと、夢中で働いた。文字通り、たたかってきた人が多い。

国際婦人年、国連婦人の10年など、国際的な影響もあって、婦人の地位は向上し、男女の差別も次第次第に少なくなった。仕事と家庭どちらをとるかでなく仕事と家庭をどう両立させるか。今の若い人は夫と具合よく分担して、上手にこなしている人も多い。呼び方も「共稼ぎ」から「共働き」と変り、今は「DINKS」「ツインカム」と言うのだそう。

男女雇用機会均等法が施行されて二年、女性にとって、これからがまた新しい時代となるだろう。働き過ぎと言われる男性の働き方に同調してしまっているのだろうか。また、女性の転勤、単身赴任という問題も出てくる。働らく女性達が、実力を貯え、しなやかに問題を解決していつてくれるのを期待したい。

（1回生）